

令和元年5月21日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02817

研究課題名(和文)日本語学習者談話の有効性に関する研究

研究課題名(英文)Research on the effectiveness of Japanese language learners' discourse

研究代表者

高橋 美奈子 (TAKAHASHI, Minako)

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：60336352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで研究代表者ら3名が取り組んできた「日本語学習者の言語行動に関する探索的研究」を踏まえ、新たに「日本語学習者談話の有効性」に着目し、次の二つの観点から日本語学習者談話の有効性を実証した。

「第三者言語接触場面」(日本語非母語話者同士)と「相手言語接触場面」(日本語非母語話者と母語話者)の自然談話を資料として、談話構造や機能の観点から比較分析を行い、「第三者言語接触場面」で獲得できる言語行動を明らかにした。上記の二つの場面の談話資料について、来日直後と帰国前の談話を比較分析し、日本語環境においてどのような言語行動を獲得できるのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本語教育においてはあまり意義が見出されなかった「第三者言語接触場面」で日本語学習者がどのような言語行動を獲得するのかに着目した点に特色があると言える。さらに、日本語教育の教室場面のやり取りで最も多い学習者同士のやり取りの意義を示すだけでなく、これまで日本社会に当然のようにあった価値観、「日本語母語話者＝標準、日本語非母語話者＝逸脱」という日本語使用者間における固定的な二項対立を多元的に捉え直す意義も併せ持つ。

研究成果の概要(英文)：In this research, we focused on "effectiveness of the Japanese language learners' discourse" based on "exploratory research on the verbal behavior of Japanese learners" that three research representatives have been working on. The effectiveness of Japanese language learners' discourse was demonstrated from two perspectives.

(1) We compared and analyzed discourse structures and functions using natural discourse in two situations: "third-party language contact situations" and "partner language contact situations", and clarified the verbal behavior that can be acquired in "third-party language contact situations". (2) With regard to the above two discourse situations, we analyzed the discourse immediately after the learners arrived in Japan and one year later, and clarified what kind of verbal behavior can be obtained in the Japanese environment.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語学習者 接触場面 自然談話

1. 研究開始当初の背景

2015 年度に開催された「日本語教育学会秋季大会」で、「これからの日本語教育は何を目指すか - 民主的シティズンシップ教育の実践 - 」と題したパネルが発表された。名嶋他 (2015) はこのパネルで、日本語教育における複言語主義に立った言語教育の重要性を訴えていたが、日本語における複数性の価値を実証した研究は十分とは言い難い。本研究は、多様な日本語使用者による日本語談話の価値を問いなおすための実証的研究に位置する。

近年、日本語教育において真のコミュニケーション能力を培うためには、母語話者による「自然な」(宇佐美 2012) かつ「本物の」(品田 2012) 談話教材を使う必要性が指摘されており、そのために、母語話者が実際にどのようなコミュニケーション活動を行っているのかを明らかにするための研究が必要不可欠であると、野田 (2012) は指摘している。このように日本語教育における対話能力の獲得においては、母語話者による談話の有効性のみが語られることが多い。一方で、大平 (2001) は、「ネイティブスピーカー = 標準」「ノンネイティブスピーカー = 逸脱」という固定的な観念が強化されることに対し警鐘を鳴らしており、非母語話者の行為が常に「逸脱」としてあるのではなく、相互行為的实践の中で協働的に構築されると指摘している。

このような母語話者と非母語話者によるインターアクション場面は接触場面と呼ばれ、非母語話者の言語使用実態の把握に有効であるが、これまでの研究では母語話者と非母語話者によるやり取りが中心であった。ファン (1999、2006) は接触場面を「相手言語接触場面」、「第三者言語接触場面」、「共通言語接触場面」と3つに分類し、非母語話者同士の場面を「第三者言語接触場面」と名付けた。その後、ファン (1999) や春口 (2004)、岩田 (2006) らによって、「第三者言語接触場面」の特性や会話参加の様相が明らかにされてきたが、「第三者言語接触場面」でどのような言語行動を獲得するのかという第二言語習得の観点からの研究は管見では見当たらない。

申請者ら (研究代表者および研究分担者) は、これまで現代日本語の職場における自然談話データの収集・コーパスの作成 (現代日本語研究会編 1997、2002、2011) および現代沖縄社会における自然談話データの収集・コーパスの作成 (高橋 2015) を行い、現代日本語における複数性の価値について考察してきた。さらに、平成 25 年度から3年間は母語話者談話だけでなく、日本語学習者談話にも着目し、第三者言語接触場面の自然談話 (日本語非母語話者同士の二者間談話) と相手言語接触場面の自然談話 (日本語非母語話者と母語話者の二者間談話) を収集し、日本語非母語話者による日本語バリエーションの実態を明らかにするための調査・研究を行ってきた。この3年間の研究では、(1) 学習歴の違いによって意味交渉における調整ストラテジーが異なること (本田・谷部・高橋 2014)、(2) 日本語環境が対話を維持するための言語行動バリエーションの広がりに影響を与えていること (谷部・高橋・本田 2016) を明らかにした。これらの研究から、必ずしも母語話者との談話が学習者との談話より対話能力に必要な言語行動のストラテジー獲得のために有効というわけではなく、第三者言語接触場面における談話から獲得できるストラテジーがあるのではないかということが示唆された。そこで、日本語教育においても第三者言語接触場面を取り入れることの有効性を実証する必要性を感じ、本研究課題の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、これまで研究代表者ら3名が取り組んできた「日本語学習者の言語行動に関する探索的研究」を踏まえ、新たに「日本語学習者談話の有効性」に着目し、次の二つの観点から日本語学習者談話の有効性を実証するための発展的研究である。

第三者言語接触場面 (日本語非母語話者同士) と相手言語接触場面 (日本語非母語話者と母語話者) の自然談話を資料として、談話構造や機能の観点から比較分析を行い、第三者言語接触場面で獲得できる言語行動を明らかにする。

上記の二つの場面の談話資料について、来日直後と帰国前の談話を比較分析し、日本語環境においてどのような言語行動を獲得できるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、日本語学習者が第三者言語接触場面および相手言語接触場面においてどのような言語行動を獲得するのかを明らかにすることに主眼を置いている。申請者らが谷部 (2013) で3年間かけて収集したデータを用いて、次の3点の方法で分析する。

収集したデータを談話分析に耐えうるように文字化の原則 (佐竹 2016) に従って整備し、コーパス化する。

第三者言語接触場面および相手言語接触場面の自然談話における発話を談話構造の観点 (談話進行・談話管理) ならびに言語行動のバリエーションの観点 (スピーチレベルシフトの機能、ジェンダー指標形式、確認表現等) から比較分析する。

上記コーパスを来日直後と帰国前の縦断的な観点から比較分析する。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の5点である。

これまでの自然談話研究においては、母語話者による談話コーパスが主で、学習者による談話は面接場面での学習者談話(鎌田・山内 2004)のように場面が特定されていたり、縦断的研究には適さないコーパスに限られていたが、本研究によって、来日時と帰国前の学習者による「第三者言語接触場面」と「相手言語接触場面」の自然談話をコーパスとして整備したことにより、縦断的研究が可能になった。

コミュニケーションを円滑にするためのスピーチレベルシフトについては、これまで日本語学習者には習得が困難だと言われていたが、「第三者言語接触場面」であっても、多様なシフトの機能を用いていることがわかり、さらに、「相手言語接触場面」と比較すると、出現するシフトと機能が異なる可能性も明らかになった。

ジェンダー規範については、母語場面でも意識と実態の乖離が指摘されているが、学習者の規範意識を検証した研究は十分とは言えない。そこで、「相手言語接触場面」と「第三者言語接触場面」の自然談話データにみられるジェンダー指標形式を比較分析したところ、「相手言語接触場面」で、より日本語のジェンダー規範を順守しようとする言語使用の実態が見られ、「第三者言語接触場面」の方が母語話者の言語実態に近い傾向があることを明らかにした。

日常生活において、相手に発話の意味内容や聞き手の知識について確認をとりながら話を進めていくという言語行動は頻繁に行われており、特に「でしょう」は母語話者の話し言葉コーパスでもよく見られるが、初級段階の日本語教育では「確認」用法が十分に扱われているとは言い難い。そこで、上記と同じ談話データを縦断的かつ横断的に観察・分析したところ、確認要求表現のバリエーションの広がりと変化が明らかになった。

「第三者言語接触場面」との違いを知るための比較資料とするために、「相手言語接触場面」の談話データを用いて、学習者の談話管理能力の変化を縦断的に分析したところ、来日直後の談話では、母語話者が質問を投げかけ「会話を進行する」役割を果たし、学習者は最小限の情報提供に終始する割合が高かったが、1年後の会話では、学習者も「会話を進行する」役割を担うようになり、相手の情報提供にさらに情報の追加を求める複層的な談話進行を行うなど、談話管理能力に変化が見られることが分かった。

これまで第二言語習得研究においては、日本語学習者による言語実態を明らかにする必要性を述べた研究は数多くあるが、いずれも日本語学習者の音声あるいは語彙、文法の側面からの誤用に着目したものや日本語学習者のコミュニケーション上の問題点を指摘したものが中心であった。また、実際の日本語学習者による言語運用の実態を明らかにしようにも、自然談話については、母語話者による談話コーパスが主で、学習者による談話のコーパスは限られていた。本研究は、申請者らによるこれまでの3年間の研究成果である「第三者言語接触場面」と「相手言語接触場面」の自然談話をコーパスとして、日本語教育においてはあまり意義が見出されなかった「第三者言語接触場面」で日本語学習者がどのような言語行動を獲得するのかに着目した点に特色があると言える。さらに、日本語教育の教室場面のやり取りで最も多い学習者同士のやり取りの意義を示すだけでなく、これまで日本社会に当然のようにあった価値観、「日本語母語話者 = 標準、日本語非母語話者 = 逸脱」という日本語使用者間における固定的な二項対立を多元的に捉え直す意義も併せ持つ。今後の研究展開として、各接触場面の特性をさらに分析し、日本語教育に有効に取り入れるための方法論の構築の必要性が示唆された。

【引用文献】

- 岩田夏穂(2006)「日本語非母語話者同士の会話参加の様相：留学生の自由会話の場合」『人間文化論叢』第9巻、お茶の水女子大学、pp.175-187.
- 宇佐美まゆみ(2012)「母語話者には意識できない日本語会話のコミュニケーション」野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版 pp.63-82.
- 大平未央子(2001)「第3章 ネイティブスピーカー再考」野呂香代子・山下仁編著『「正しさ」への問い 批判的社会言語学の試み』三元社 pp.85-110.
- 鎌田修・山内博之(2004)『KY コーパス Version 1.2』
- 現代日本語研究会編(1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 現代日本語研究会編(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- 現代日本語研究会編(2011)『合本 女性のことば・男性のことば(職場編)』ひつじ書房
- 佐竹久仁子(2016)「第2章 文字化の原則」遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編『談話資料 日常生活のことば』ひつじ書房、pp.29-40.
- 品田潤子(2012)「コミュニケーションのための日本語教育の方法」野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版 pp.147-166.
- 高橋美奈子(2015)「現代沖縄社会の自然談話からみる人称表現の諸相」『2015年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.288-293.
- 名嶋義直・野呂香代子・三輪聖(2015)「これからの日本語教育は何を目指すか - 民主的シティズンシップ教育の実践 - 」『2015年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会 pp.37-48.

野田尚史 (2012)「日本語教育に必要なコミュニケーション研究」野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版 pp.1-20.
春口淳一 (2004)「言語ホストとしての上級学習者の自己参加調整ストラテジー - 第三者言語接触場面における会話参加の一考察 - 」『千葉大学日本文化論叢』5, pp.86-73.
ファン, S.K. (1999)「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2(1), 社会言語科学会 pp.37-48.
ファン, S.K. (2006)「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所(編)『日本語教育の新たな文脈』アルク, pp.120-141.
本田明子・谷部弘子・高橋美奈子 (2014)「日本語母語話者との会話で何が学べるか - 非日本語環境における学習者の日本語習得の特徴 - 」『シドニー日本語教育国際研究大会 2014』(<https://icjle2014.arts.unsw.edu.au/jp/program?id=622&t=ppid>)
谷部弘子 (2013)「平成 25 年度～平成 27 年度 科学研究助成事業・基盤研究(C)実施報告書「日本語学習者の言語行動のバリエーション獲得に関する研究」」, 研究代表者: 谷部弘子, 課題番号: 25370582
谷部弘子・高橋美奈子・本田明子 (2016)「日本語環境は短期留学生の対話能力にどのような作用を及ぼすか」『ヨーロッパ日本語教育 19 第 19 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集 2015』pp.237 - 242 .

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

本田明子 (2019)「相手言語接触場面における学習者の談話管理能力 - 来日直後と 1 年後の能力の比較 - 」『日本語教育方法研究会誌』査読無, Vol.25. No.2 pp.68-69. 日本語教育方法研究会 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jlem/-char/ja>

高橋美奈子・谷部弘子・本田明子 (2017)「第三者言語接触場面におけるスピーチレベルシフトの機能 - 日本語学習者同士の自然談話の分析から - 」『ことば』査読有, 38 号 pp.46-62. 現代日本語研究会, DOI コード https://doi.org/10.20741/kotoba.38.0_46

〔学会発表〕(計 4 件)

本田明子 (2019)「相手言語接触場面における学習者の談話管理能力 - 来日直後と 1 年後の能力の比較 - 」第 52 回日本語教育方法研究会 (杏林大学) 2019 年 3 月 23 日

谷部弘子 (2018)「短期留学生にみる確認要求表現のバリエーションの獲得」東アジア日本語教育・日本文化研究学会 (中国: 大連・大連大学) 2018 年 8 月 25 日

高橋美奈子・本田明子・谷部弘子 (2018)「日本語学習者にみられる日本語のジェンダー規範意識 - 相手言語接触場面と第三者言語接触場面の談話分析から - 」日本語教育国際研究大会 (イタリア: ヴェネツィア「カ・フォスカリ」大学) 2018 年 8 月 4 日

高橋美奈子・谷部弘子・本田明子 (2016)「接触場面におけるスピーチスタイルの選択 - 学習者による自然談話の分析から - 」日本語教育国際研究大会 (インドネシア: バリ・ヌサデュア国際ナショナルコンベンションセンター) 2016 年 9 月 10 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕 特になし

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 本田 明子

ローマ字氏名: HONDA, Akiko

所属研究機関名: 立命館アジア太平洋大学

部局名: 言語教育センター

職名: 教授

研究者番号 (8 桁): 80331130

(2)研究分担者

研究分担者氏名： 谷部 弘子

ローマ字氏名： YABE, Hiroko

所属研究機関名： 東京学芸大学

部局名： 学内共同利用施設等

職名： 名誉教授

研究者番号(8桁)： 30227045

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。